

“障害児教育の母”と呼ばれた石井筆子(いしいふでこ)の生涯を完全映画化!

私は山田火砂子と申しまして現在43歳になる重度知的障害の娘を持つ母でございます。この娘が産まれたころには社会福祉などという言葉さえなく、まったく差別の時代でした。その頃は新聞に毎日のように親子心中という障害の子供を持った母と子が亡くなったという記事が出ていました。明治・大正時代はもっと酷かったと思います。そんな時代を通して現在になったのです。

亮一・筆子先生、お二人の生涯をかけて私共の子供のために

力を尽くして下さい、社会福祉等まったくない時代に先頭をきって戦って下さいました。その事が今日少しは良くなった障害者への理解につながったのではないかと思います。映画の中では、私共の子供達と健常の子供達との共演により、素敵なシーンがたくさん出来ました。

社会福祉に携わっておられる方々のみならず一般の方々にこの映画を見て頂けましたら幸いです。

監督 山田 火砂子



明治期、社会福祉という言葉すらない時代
知的障害児にあたかな眼差しを
向けた者がいた—

幕末、長崎県大村藩士の娘として生まれた筆子。その美貌と知性で“鹿鳴館の華”と呼ばれ、津田梅子と共に女性の教育と地位向上に力をそそいだ。しかし、最初の夫・小島果との間に生まれた三人の娘はいずれも知的障害や病弱である上、夫を若くして亡くすなどの不幸が筆子を襲う。しかし、筆子は社会活動を精力的に行い、その中で日本初の知的障害児者施設「滝乃川学園」の創始者・石井亮一と運命の出会いを果たす。その後、亮一との再婚を決意した筆子は、夫の事業を支える一方、学園の子どもたちに無償の愛を捧げ、やがて“障害児教育の母”と呼ばれるようになる。

障害者の方たちは、少し体が弱いけれど、私たちより、ずっと強くてずっと優しいんじゃないのかな、と私は思いました。この映画を観たら障害を持っている人達はたくさんいるんだなあと思いました。(神奈川 10歳 女性)

うちの息子(ダウン症児7歳)も前向きに育てようと思えた。私自身もできることから少しずつはじめてみようと思う。(埼玉 39歳 女性)

今日の行政もさほど進歩したとは思えませんが、戦前の日本の障がい者に対する差別のひどかったことに改めて憤りを覚えました。(札幌市 76歳 女性)

とても素晴らしいかったです。私は将来、特殊教育諸学校の保健体育教師になることを目指しています。今日の映画を観て、絶対に夢を叶えようと気持ちを改めました。ありがとうございました。(神奈川 20歳 女性)

「筆子・その愛—天使のピアノ—」 製作・映現代ぶろだくしょん 2006年/日本/119分/ビスタビジョン/カラー/DTSステレオ

野方ウエスレアン・メソヂスト教会

映画鑑賞会のお知らせ

予約不要

筆子その愛—天使の
ピアノ—

9月28日(日) 14:00-

礼拝堂にて

どなたもお気軽にどうぞ!

無料

自由献金あり